

あいち生物多様性保全活動担い手養成講座

基礎講座・里山編：木を伐る＝保全？

ふりかえりレポート

日時：令和 6 年 10 月 20 日(日)10 時 00 分～16 時 30 分

場所：瀬戸市 山口公民館／視察先：海上の森

1. 基調講義『里地里山の生物多様性を守る取り組み』

講師：増田 理子 先生〈名古屋工業大学 教授〉

名古屋工業大学教授の増田理子先生より、「里地里山の生物多様性を守る取り組み」についてご講義いただきました。

- ・ 里地里山やそれに付随する湿地環境は、人々による利用と管理によって維持されてきた。
- ・ 海上の森では、里山のチョウであるギフチョウが元々100 頭以上確認されていたが、近年は数頭しか確認できていない。
- ・ 海上の森での研究の結果、食草であるカンアオイは樹冠開空度 35～50%で生長量が大きいたことが明らかになった。
- ・ 人の手で木を伐って明るい森にすることが、ギフチョウの保全には効果的だと考えられる。
- ・ 大きくなりすぎると伐採には高度な技術や機材が必要となるので、手ノコ等で伐ることのできる太さのうちに伐るとコストが押さえられる。
- ・ 人力でやれることは限られているが、活動日ごとに 1 本木を伐る等、可能な範囲で手を入れればよい。
- ・ 里山だけでなく湧水湿地でも、人の手が加わらないとミズゴケ等が堆積して、湧水湿地の特徴(貧栄養・低 pH な裸地的環境)が失われることがある。
- ・ 活動により生じた変化を知ることや関係者間の合意形成のためには、継続してモニタリングを行うことが重要。
- ・ モニタリング結果を数値化することで、保全方針の決定等の関係者間の合意形成に役立つ。
- ・ その地域の環境の成因には地質も関わっている。地質は、シームレス地質図により確認することができる。



2. 海上の森 現地視察

現地視察では、伐木作業を行った明るい森と隣接する作業を行っていない暗い森を比較したり、堆積したミズゴケの除去や侵入した樹木の伐採を行った屋戸湿地を見学しました。

伐木作業が行われた場所では多くの葉をつけたカンアオイの株が確認できたほか、湿地では湧水湿地特有の貧栄養な裸地的環境が広がり、東海丘陵要素植物群の一種であるトウカイコモウセンゴケが繁茂していました。



増田先生が伐木作業を実施した場所



屋戸湿地



カンアオイ



トウカイコモウセンゴケ

3. 質疑応答

参加者が疑問に思った点や深く掘り下げて聞きたい点について、増田先生に回答いただきました。

Q.移植や移入は絶対にしてはいけないのか？

A. むやみに移植や移入を行うべきではないが、関係者間で検討の上やむを得ず実施する場合は、いつ、どこからどこへ移植したのかという記録が残っていること。例えば、最後の自生地が開発される場合、移植の記録を明確にしておかないと、移植先で由来不明として駆除対象になってしまう可能性がある。また、東山植物園やのんほいパークなどに移して人工的に保存することも可能。

Q.保全活動をする上で専門家の方に意見をいただきたいが、どうやって探せばいいのかわからない。

A.愛知県自然環境課では生物多様性に係る専門家派遣制度があり、自然環境課が適切な専門家を人選し、派遣してくれる(相談・派遣に関する費用は無料)。

※ 詳細は、自然環境課 生物多様性保全グループまでお問い合わせください。

Q.深い森では生物多様性が豊かではないのか？木を伐りに行った方がよいのか？

A.これまでの土地利用や立地によっては、人の手が入っていない深い森も豊かな生物多様性を有しているので、深い森も人の手が入った明るい森も、どちらもあって良い。日本の国土面積や地形、今後の人口等を考えると全面的な管理は難しく、視察した海上の森の中でも結果的に長期間人の手の加わらない部分が生まれ、2000 年後には原生自然環境保全地域のような生態系が形成される可能性もある。

Q.伐木作業はどれくらい大変なのか？

A.大径木だと、作業時間は1日6時間ほどで、大学生が3本伐って運び出せる程度。

4. 増田先生のまとめ

- ・ 保全活動は、自然というきっちりしていないものが相手のため、「ゆるく」行うことが持続性の観点からも大切である。
- ・ 残したいと感じる見た目のきれいな植物であっても、目指すべき環境とは異なる環境を好む種もいる。生物多様性保全という点では、見た目の良さだけで判断せず、自然のすべての要素が重要な役割を持っていることを理解する必要がある。